

穏やかなほほえみと温和なお心の 金芳漢 Gim Banghan キム (金)・バンハン先生*

権在一 Gweon Jaeil クオン・ジェイル

ソウル大学言語学科教授

*【原注】この文は筆者の次の2つの文を土台にしてあらたに修訂したものである。[1]‘잔잔한 미소, 온화한 마음 (穏やかなほほえみと温和なお心)’ (《김방한 선생 10주기 추모 문집, 김방한 선생님을 다시 만나다 (金芳漢先生 10周年追慕文集, 金芳漢先生に再会する)》, 85-101, 한국언어학회 (韓国言語学会)・한국알타이학회 (韓国アルタイ学会), 2011), [2]‘김방한 선생의 학문 세계 (金芳漢先生の学問体系)’ (《김방한 선생 추모 학술대회 논문집 (金芳漢先生追慕学術大会)》, 1-22, 한국언어학회 (韓国言語学会), 2011)。

1. 金芳漢先生と会う

ソウル大学校文理科大学が東崇洞 Dongsungdong トンスンドン*にあった頃の1973年の2年生の1学期末のある日、東部研究棟にあった言語学科合同研究室に入った。合同研究室とは今様に言えば学科事務室兼図書室である。助教が「権君、金芳漢先生が朝から探していらっしゃったよ。速く行きなさい。」と言った。合同研究室を出るとちょうど右側の部屋が金芳漢先生の研究室で、廊下の一番端の部屋が許雄 Heo Ung ホ・ウン先生**の研究室だった。許雄先生の研究室は1年生の時からしよっちゅう寄った部屋だが、金芳漢先生の研究室は初めてだった。それですっかり緊張したまま先生の部屋に入った。ところで許雄先生の部屋とは全く違っていた。あまりにもきちんと整頓された書架と机の上に一寸の乱れもなしに置かれた本。アイロンがけされたばかりのきちんと筋の入った先生のズボンのように。

*【訳注】大学校は総合大学、大学は単科大学あるいは学部のこと。東崇洞は鍾路区 Jongrogu チョンノグの鍾路5街[5丁目]の近くにあり、かつて旧京城帝大の校舎がここにあった。現在は Maronie Gongweon マロニエ公園となっている。

**【訳注】言語学科の第3代主任教授(1957年5月-)。

「君の誠実な学問の態度については講義時間でもよく知っているけれども、「比較言語学」の学期末試験の答案を見るとなかなかのものだなあ。完璧に書いてある。昨日の晩国文科の安秉禧 An Byeongheui アン・ビョンヒ先生に会ったんだが、あの先生の科目も試験がとてもよく出来ていると褒めていた。ますます発奮して学問の道に励みなさい。」このお言葉に「はい。」と声高に答えて胸をドキ

ドキさせて研究室を出た。この日が金芳漢先生との個人的な最初の出会いだった。

このように東崇洞で金芳漢先生との出会いが始まった。そして 28 年たった 2001 年 10 月ソウル大学病院で先生との最後の会いを行うこととなった。2001 年夏からわたくしはアメリカのブルーミントン Bloomington にあるインディアナ大学にいた。そうするうちカザクスタンのアルマトゥで第 1 回中央アジア韓国学会が開かれ、そこに行くためにソウルにしばらく寄った。ソウルに來ると、先生が入院していらっしやるとのことだった。それで病院に駆け付けた。じっと横になっていらっしやり、時々目をお開けになった。わたくしが参りましたと言うと、いつものように穏やかなほほえみを浮かべて手を握られた。わたくしは手にだんだんと力をこめて先生の手をしっかり握った。何かおっしゃろうとしておられたようだが、言葉をつづけることはなく、温和な表情をなされた。カザクスタンに行ってみますとご挨拶を申し上げますと、うなずかれた。

金周源 Gim Juweon キム・ジュウォン教授とアルマトゥで学会に参加していた時、先生が 10 月 18 日にお亡くなりになったという連絡が来た。ああ！ この間病院でお会いしたのが最後になるなんて。そしてここにやって来てお葬式にも出られないなんて。先生に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。ソウルに戻った時、先生のお宅に寄って、北極に出張中で遅れて帰国なさったという三男の方を弔問し、ともに先生を回顧した。先生の墓碑銘を書くようにと言われたら次のように書かなければと考えて先生のお宅を辞した。「ここにわが国の現代言語学とアルタイ言語学の礎を置かれた金芳漢先生眠る」。

2. 金芳漢先生の学問の特徴

金芳漢先生(1925-2001)はソウル大学校文理工科大学〔文理学部〕を卒業し、ソウル大学で教授(1953 年講師, 1956 年-1990 年)として在職し、言語学研究と教育に一生を送ったわが国の第 1 世代の言語学者である。韓国言語学会会長と韓国アルタイ学会会長を担い、草創期の学会建設にも貢献した。

先生の自叙伝『한 언어학자의 회상(ある言語学者の回想)』(1996)によれば、先生は中等学校から大学時代に至るまで英語文法学に心酔した。ここから先生の言語学が出発した。このように出発した金芳漢先生の学問の基本的な性格は次の 2 つに要約される。

第 1 に、現代言語学の理論を幅広く渉猟して解説することによって草創期の韓国言語学界を啓蒙した。このために『言語学論攷』(1970)を刊行し、また「言語学史」の講義を続けた。そのようにしてソシュールの構造主義言語学、プラハ学派の機能主義言語学をはじめとするヨーロッパの言語理論そしてアメリカの構造主義言語学、変形生成文法理論に至るまで世界言語学界の多様な理論と方

法論を紹介し、広い視覚で言語理論を眺めることを強調し、韓国の言語学、韓国の言語学者が世界の流れの中で後れを取らないように言語学第1世代の責務を尽くした。

第2に、インド・ヨーロッパ語歴史比較言語学を深く研究し、これを土台としてモンゴル語学を中心に韓国のアルタイ言語学を確立し、ひいては朝鮮語の系統研究の方向を鼎立した。金善琪* Gim Seon'gi キム・ソング先生の勧めでアルタイ言語学を研究課題とし、モンゴル語学を専攻した。モンゴル語学をはじめとするアルタイ言語学を研究するためには先輩格の理論であるインド・ヨーロッパ語歴史比較言語学を深く研究したのは自然なことだった。

*【訳注】ソウル大学文科大学言語学科第2代主任教授(1950年1月-1957年10月)

金芳漢先生の代表的な著書『한국어의 계통(朝鮮語の系統)』(1983)の「自序」で明らかにした次の叙述はまさに先生の学問の基本的な性格をよくあらわしてくれている。「朝鮮語の系統を研究するための基本的な方法論とアルタイ諸語に関する基本的な知識に関する記述が必要だった。本当の比較言語学の方法論を知らない、そしてアルタイ諸語に関する深く範囲の広い知識のない朝鮮語系統研究は一個の似非朝鮮語系統論に過ぎない。」これは個別言語研究のためにアルタイ言語学理論についての深みのある研究の必要性和価値を強調したものである。このように金芳漢先生の学問の特徴はまさに「一般言語学から個別言語学へ」と言えよう。

つとに『言語学論攷』の「自序」で先生は次のように言語学研究の正しい方法を闡明にした。理論言語学の土台のない個別言語学というものは考えることができない。どの理論や学説も歴史の大きな流れの中で捉えて見ることによってのみ真の理解が可能である。より高い次元で視野を広げて初めて、批判的な眼目を持ち得るようになる。

そして先生はいろいろの言語理論や各学派の理論を研究する際にどの側にも傾かず中庸の態度を取る研究方法を強調した。先生は講義の度に言語学徒は初めから何らかの先入観にとられることを避け、自分自ら判断して自分の方向を自ら決める能力を養うことが重要であることを強調した。

また先生は一般言語学だけでなく個別言語の研究も強調した。言語学者は一定の水準のなんらかの個別言語についての知識を備えて初めて個別言語の記述は勿論一般言語学への展開が可能であると強調した。それで自らモンゴル語を個別言語として研究したのである。朝鮮語の系統を研究し、また朝鮮語の音韻史、文法史に関心を持ったこともまたしかりである。今このような研究方法を土台に作られた先生の学問を次のような分野に分けて順に眺めることとしよう。

① 一般言語学と言語学史の研究

- ② 歴史比較言語学の研究
- ③ アルタイ言語学とモンゴル語学の研究
- ④ 朝鮮語の系統と歴史の研究

3. 一般言語学と言語学史の研究

先生の一般言語学と言語学史に関する著書には1970年の『言語学論攷』と1985年の『言語学論攷(II)』がある。これを1999年に『言語学論攷』として合本として刊行した。『言語学論攷』(1970)は1950年代末から1960年代にかけて発表された論文の中で言語学の本質、構造、研究方法と原理等、特にソシュールの構造主義言語学、プラハ学派理論、アメリカの構造主義言語学、変形生成文法に至るまで一般言語学理論に関する論文を含んだものである。

特に「言語学の理論と文法」は19世紀初から構造主義以前の言語学研究史である。19世紀の古典比較言語学、少壮文法学派、心理主義言語学、20世紀初期の言語地理学をはじめとする多様な言語理論を解説した。「現代言語学の傾向」は構造主義以後の研究傾向を全般的に眺めつついくつかの問題点を考察したもので、ソシュールの言語理論、音韻研究、言語分析と層位、イギリスの言語学、アメリカの言語学、デンマークの言語学、そして通時音韻論を分析した。「現代言語学の言語構造の概念」は当時言語学の論著で構造や体系という用語が一定の概念規定なしに互いに混用されて用いられたものを正すために「構造」の概念を正確に究明した。

『言語学論攷』(1970)が主に言語の構造と関連した問題を扱ったのに比して『言語学論攷(II)(1985)』では現代言語学で提起される核心的な課題に重点を置いている。ある学問の分野である特定の分野の研究が活発になったと言って、他の分野の研究が均衡をもって発展しない限り、その学問全体についての研究が発展したとは言えないと言ってわれわれの言語学界の均衡ある発展を強調している。この本には金芳漢先生の言語学徒言語研究官が体系的に整理されており、併せてフェルディナン・ド・ソシュール、ロマン・ヤコブソン、アンドレ・マルティネ、ノーム・チョムスキーについての言語学史的な叙述が展開されている。

1963年から長い間「言語学史」を講義しながら先生は言語学史の著述を計画したが、意思を全うし得なかった。そこでまず1982年にミルカ・イヴィチュ Milka Ivić の『言語学史』を翻訳して刊行した。言語に関連するすべての分野とあらゆる学問の多様な理論を理解するのにピッタリ合うのがイヴィチュの本だと回顧したことがある。

金芳漢先生の一般言語学の基盤はソシュールの『一般言語学講義』(1916)である。ソシュールについての研究は先生の論著のいたるところにあらわれているが、最終的には1998年『소쉬르: 현대 언어학의 원류 (ソシュール: 現代言語

学の源流)』を刊行して仕上げとした。この本で言語の本質とソシユールの研究精神を示そうとしている。

一方先生は言語学の概説書を執筆しようという強い意志があった。言語学を始めて学ぶ学生たちと言語の本質と構造に関心を持つ一般教養人が興味を持って言語学全般に易しくアプローチして理解することのできる概説書を執筆しようとした。このような考えの結実はまず共著で2冊の本を刊行した。1985年の『言語学概論』、『一般言語学』がそれである。1992年には単独の著述として『언어학의 이해 (言語学の理解)』を刊行した。伝統言語学の理論と現代言語学の理論のどちら側にも偏ることのない本を意図している。いろいろな理論は禪的に排他的なのではなく互いに相補的なものなので、一つの理論に立脚するよりは多様な理論をあまねく観察して提示したのである。

4. 歴史比較言語学の研究

金芳漢先生の主たる研究対象はアルタイ言語学である。アルタイ言語学研究のためにはインド・ヨーロッパ語を基盤とする歴史比較言語学を研究しなければならないという基本的な考えを持っていた。そこで常に歴史比較言語学の理論研究から手を放すことがなかった。

インド・ヨーロッパ語歴史比較言語学から出発した先生の歴史比較言語学研究はその方向をだんだんと広げてついには語源論、先史言語学に至った。そこで歴史比較言語学は絶えず新しい問題を提起しなければならないことを強調した。例えば共時態と通時態の関係、歴史言語学での説明の問題、言語変化の原因、言語変化についての社会言語学的アプローチ、言語類型論と歴史言語学との関係等を強調しつつ、いろいろな問題はまさに歴史比較言語学の関心領域の拡大を意味するものであると言った。特に歴史統辞論は、言語類型論研究の必要性を強調した。

歴史比較言語学に関する著書の中で代表的な2つの著書について見ることにしよう。まず1988年に刊行された『歴史比較言語学』である。この本は何かひとつの理論に立脚して言語変化の統一した原理を説明しようとしたものではなく、いろいろの理論をあまねく眺めつつ、できる限りその長所と短所を比較検討しようとしたものである。具体的には歴史言語学と「説明」、音変化、形態変化と類推、統辞変化、内的再構、比較再構等を対象としている。この本で言語年代学と意味変化については扱っていないが、言語年代学は根拠が希薄であり、理論が不合理で特に数値で表示できないものを数値化しようとするところに危険があると言っており、意味変化の歴史的アプローチは資料を収集してそれを整理する最初の段階を大きく抜け出せないでいると言っている。

1994年に刊行した『言語と歴史』はその間「歴史比較言語学」を講義しつつ、

またアルタイ言語学と朝鮮語の系統を研究しつつ提起されたいろいろの方法論的問題を考察した研究である。特に言語学が考古学や先史学等と接ぎ木されて、研究がどのように展開しているかを考察している。併せてインド・ヨーロッパ語比較言語学でどのような要素がどのように比較され、またどのように再構されるかを具体的に検討している。

5. アルタイ言語学とモンゴル語学の研究

アルタイ言語学に関する金芳漢先生の代表的な論文は「Altai 어에 있어서의 보충법에 관한 고찰 (Altai 語における補充法に関する考察)」(1963), “Relation between Korean and the Altaic languages”(1970), 「알타이제어 연구의 동향 (アルタイ諸語研究の動向)」(1979)等である。

金芳漢先生の主たる個別言語研究はモンゴル語である。モンゴル語と朝鮮語の音韻、文法の比較に多くの力を注ぎ、『황금사 (黄金史, Altan Tobči)』に代表されるモンゴルの古典の翻訳とモンゴル語の音韻と語彙研究に努めた。モンゴル語学研究についての主要論文は1999年に刊行された『몽골어연구 (モンゴル語研究)』に再収録されている。

モンゴル語研究の最初の論文は1957年の「‘원조비사’ 몽골어연구 - 그 문법체계를 위한 시도 - (『元朝秘史』モンゴル語研究—その文法体系のための試み—)」であるが、奪格の用例に見えるいくつかの特徴を明らかにしている。そして初期の一連のモンゴル語関連の論文を通じて朝鮮語の主格助詞の起源を明らかにしようとする研究を行っている。アルタイ語で主格が「ゼロ」形態として実現するという共通の特徴を基盤として中世朝鮮語で確認される主格助詞「이 i」の起源を3人称代名詞に置いた。『蒙語老乞大』にあらわれる i をポッペのように対格と見ずに、3人称代名詞の主格形態 i が化石化したものと見た。そしてモンゴル語、トルコ語、朝鮮語の人称代名詞を比較してアルタイ語の1人称代名詞複数形は単数形の bi に複数接尾辞が添加されて作られたものと見、朝鮮語の1人称代名詞複数形「우리 uri」を *buri と再構し、アルタイ語のような起源を提起した。

『몽골어연구 (モンゴル語研究)』(1999)に載った論文は1950年代から発表し始めたモンゴル語についての研究成果である。その内容は次の如くである。

『Altan Tobči 研究』はアルタン・トプチ・モンゴル語についての言語学的研究であり、異本と内容の検討を通して編述年代の範囲を1604-1630年と限定し、音韻、形態、統辞の特徴を明らかにしている。「원시 몽골어의 장모음에 대하여 (原始モンゴル語の長母音について)」は語頭子音群についての研究を通じてモンゴル方言の語頭子音群はアクセントが語頭音節から非語頭の他の位置に完全に移動した単語でアクセントの保護を受けない第1音節の母音及び語頭母音が脱落

して現れるようになったものであることを明らかにしている。「몽구오르 방언의 차용어에 대하여 (モンゴル方言の借用語について)」はモンゴル方言に入った漢語、チベット語、満洲語を品詞別に観察したものである。

6. 朝鮮語の系統と歴史の研究

朝鮮語についての金芳漢先生の代表的な研究分野は系統研究である。アルタイ言語学についての既存の研究成果を渉猟した後これを体系化し、ここに朝鮮語資料を土台に朝鮮語の系統研究を展開している。

ラムステットが朝鮮語の系統がアルタイ語族であることを分明にして以後国内の学者たちがこれを裏付けるための研究に没頭している時、これについての懐疑論を提起した論文が正に金芳漢先生の『한국어 계통 연구의 문제점 (朝鮮語系統研究の問題点)』(1976)である。この論文は他の研究者たちがすんなりと受け入れがたいものだった。ポッペがその著所 “*Introduction to Altaic Linguistics*”(1965)で朝鮮語は元来非アルタイ語だったのがアルタイ語を使用した層に載せられたものであり得ると言ったことを土台に、金芳漢先生は言語学的に朝鮮語の系統関係がたやすく明らかにされない理由がまさにここにあるという考えに至った。引き続き朝鮮語にある非アルタイ語要素を探し始め、その視野には古アジア族の言語であるギリヤーク語に至った。ここで先生の朝鮮語系統研究は具体化された。

1983年の『朝鮮語の系統』は『大宇 Daeu テウ学術叢書 人文社会科学1』という著書として刊行された。この著書は朝鮮語の系統に関する今までの研究を考察しつつ、その間先生が発表した論文を体系化して朝鮮語系統に関する先生の理論を提示したものである。平素考えてきた朝鮮語はどこから来、その根は何か、また朝鮮民族が使用している言語は他のどの言語と親近関係があり、また朝鮮語はどのように形成されたのかについての答えを提示したものである。

著書『朝鮮語の系統』で提示した先生の系統研究の意義を整理してみると次のとおりである。第1に、朝鮮語の系統問題である。著書の第4章で朝鮮語とアルタイ語を音韻、形態、語彙面で比較し、共通の要素があることを確認した。特に音韻対応に注目した。まだ音韻体系全般にわたった音韻対応を正確に公式化できる段階にまで至ってはいないが、今後その対応の規則を確定し得る可能性が十分にあることを確認した。「本研究は朝鮮語とアルタイ諸語の親近関係を仮定してそれを証明しようとしたものである。そしてそれを証明するために証拠を提示した。ただその証拠が今後もっと補強され、もっと精密化されなければならないだろうが、この研究を通じて朝鮮語の系統の輪郭がだいたいあらわれたと筆者は考える。何人かの学者は朝鮮語とアルタイ諸語の関係を図式化して朝鮮語の位置を提示したことがある。しかし筆者には朝鮮語の位置は図式化する程

度に確実ではない。しかし筆者の今の考えでは朝鮮語がツングース諸語と大変密接な関係にある蓋然性が最も高いと考える。」

第 2 に、原始朝鮮半島語の問題である。先生は著書の第 3 章で古代朝鮮半島には系統を異にするいくつかの言語が存在した蓋然性があることをいろいろな角度から考察した。そして古代朝鮮半島の言語状況は正確には判断しづらいが、昔の地名が示すところによって 2 つの言語層があるものと推定した。昔の地名は朝鮮半島の言語がアルタイ語化した状態を示していると同時に、何か知られざる言語の基層があったことを反映するものであるとした。そこで古代朝鮮半島には原始朝鮮半島語と呼ぶ基層言語があるとした。「三国史記地理志の地名で推定される言語には 2 つの言語層がある。一つはツングース語系の言語層であり、もう一つは何かの不明の言語層である。この不明の言語層がまさに筆者が原始朝鮮半島語と呼ぶものである。そしてこの原始朝鮮半島語を基層としてその上にアルタイ語系の言語が載せられた状態を反映するのが地名で推定される言語なのである」。

第 3 に、今後の系統研究の課題である。朝鮮語と隣接の言語の間の親近関係についての証拠がもっと補強されなければならないという課題である。そうするためには今後もっと多くの対応の例を探さなければならないとした。そして説明的装置として原始朝鮮半島語という基層の仮説はポッペが言及した非アルタイ語要素の一つを具体化したものとして今後証明されなければならない仮説であるとした。

7. 金芳漢先生を讃えて

大学時代に、先生は退勤途中われわれによく夕食をおごってください。中華料理もおごってください、豚カツもお好きだったのかそれもよくおごってください。今はなくなったが、その頃奉天洞**Bongcheondong* ポンチョンドンで有名な「가을비 우산 속 *Gaeulbi usan sog* カウルピ・ウサン・ソク (秋雨の傘の中)」というビアホールにも時々連れて行ってくださり、市庁前の「우전 *Ujeon* ウジョン (羽田)」という日本料理屋にも好んで連れて行ってくださった。李美子 *Yi Mija* イ・ミジャの「울어라 열풍아 *Uleora yeolpunga* ウロラ・ヨルプンア (泣け、熱風よ)」がお好きだということもこの時おっしゃった。いつも穏やかなほほえみと温和なソンビ (士人) のお心で。

*【訳注】ソウル冠岳 *Gwanag* クァナク区にある街。ソウル大学の下にある。

先生に初めて教室でお会いして以来、教室の中で、そして教室の外で 30 年近く先生に師事した。学問的に受けた恩は勿論言うまでもなく大きいですが、穏やかなほほえみと温和なお心とともに授けてくださった人間的な先生の教えはますます深くかつ高い。今個人的な話でこの文を終えようと思う。

わたくしが講義を始めてから今まで変わらない講義の方法が 2 つある。一つは講義の始まりの時間を正確に守って遅刻を許さないことである。知性人ならば約束を守るのが大変重要だということを学生たちに目覚めさせるためである。もう一つは筆記する方法を最初の時間に告げ、その学期中ノートを確認することである。ノートの片側は講義内容を整理するようと言い、他の片側は各々講義内容と関連する参考文献を求めて勉強して補充するようと言う。この 2 つはまさに金芳漢先生から教わった講義方法そのものなのである。

(菅野裕臣訳)

(『새국어생활』, 2017 년 제 27 권 제 1 호 봄, 151-162 페이지 『新国語生活』, 2017 年第 27 卷第 1 号・春, 151-162 ページ)